様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２６ 日現在

機関番号：３５３０２
研究種目：若手研究
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｋ１２９７２

研究課題名（和文）フルク・グレヴィル後期詩作品における政治批判について

研究課題名（英文）Critiques of Jacobean Government in Fulke Greville's Later Works

研究代表者
西野　友一朗（Nishino, Yuichiroh）

岡山理科大学・教育学部・講師

研究者番号：１０８４５６９７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究を通して、これまで初期近代英文学研究において等閑視されてきたフルク・グレヴィルの作品を、詩人の伝記的側面を踏まえながら歴史的文脈において分析し、作品にはジェイムズ１世の政治に対する批判が内包されていることを突き止めることができた。その主要な成果として２件の論文掲載を果たした。１つ目は広島大学に提出した博士論文であり、グレヴィルが初期ステュアート朝における宮廷腐敗を批判していることを指摘した。もう１件はModern Language Reviewに掲載した論文であり、戯曲『ムスタファ』には、夭折したヘンリー皇太子を国王ジェイムズが殺害したという噂が反映されていることを分析した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究によって得られた成果は、まず国内外において等閑視されてきたフルク・グレヴィルの作品研究を、先行研究をまとめた上で、新たな解釈を実証主義的に提示できたという点で、学術的な価値が大きい。特にこれまでのグレヴィルの作品分析の多くは、作品の形式や他の同時代の詩人の作品との関係性などに注目したものが多かった。本研究では作品をグレヴィルの伝記的側面と手書き原稿の両方から分析したことで、作品が書かれた年代や背景を絞り込むことができた。それによって、初期ステュアート朝の政治批判が作品の中で展開されていることを突き止め、グレヴィルの作品が政治的文脈からも解釈できることを提示できた。

研究成果の概要（英文）：I have explored Greville’s literary critiques of court corruption in the Jacobean Government, focusing on his works written during the Jacobean period(1603-1625). One of the notable outcomes will be my PhD dissertation submitted to Hiroshima University in March 2021. In the dissertation, I have analysed Greville’s poems and plays and then compared the textual differences between the printed text and the manuscript. In doing so, I have newly found out Greville’s implicit criticism against the Jacobean government. Another outstanding outcome is an article submitted to Modern Language Review. This article reassesses Greville’s Mustapha and newly suggests that the rumour of the untimely death of Prince Henry Stuart is elaborately and covertly written in the play.

研究分野：英文学

キーワード：フルク・グレヴィル　英文学　初期近代　初期ステュアート朝　エリザベス朝　イギリス・ルネサンス　英詩　戯曲

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

2018 年からフルク・グレヴィル(Fulke Greville, 1554-1628)の研究に関する論文集が Oxford University Press (*Fulke Greville and the Culture of the English Renaissance*, ed. by Russ Leo, Katrin Röder, and Freya Sierhuis (2018))や Routledge (*Precarious Identities: Studies in the Work of Fulke Greville and Robert Southwell*, ed. by Vassiliki Markidou and Afroditi-Maria Panaghis (2020)) から出版されたことにより、グレヴィルの作品を他の同時代に活躍した詩人たちの作品と比較する分析や、グレヴィルの伝記的要素を踏まえた実証主義的な作品分析が行われ、グレヴィル研究の活性化が今後も期待される。申請者は、上記の先行研究を踏まえたうえで、グレヴィルの作品とマニュスクリプトとの関連性を指摘し、結果として、Yuichiroh Nishino, 'Deleted King(s) in the Warwick Manuscript of *Cœlica*', *Hiroshima Studies in English Language and Literature*, 64 (2020. Mar.), 23-40 の掲載を果たした。この成果により、本研究課題で分析対象としている詩集『シーリカ』(*Cœlica*, 1633)の後期詩作品には、ジェイムズ朝の財政政策への批判が内包されていることを発見した。

２．研究の目的

本研究の目的は、英国ルネサンス期の詩人であり政治家であったグレヴィルの作品研究において、①作品が詩人の伝記的側面から実証主義的に解釈できることを再認識し、②従来、等閑視されてきたグレヴィルの政治家としての姿を作品に見出すことで、作中に国王ジェイムズ１世(James I, 1566-1625)に対する批判が内包されていることを明らかにすることである。特に本研究課題ではジェイムズ朝期に執筆された詩作品『シーリカ』と戯曲『ムスタファ』(*Mustapha*, 1633)に焦点を当て、ジェイムズに対する批判がどのように表現されているかを検証する。作品と国王批判の関係性を分析する際、グレヴィルの伝記的側面に着目するだけではなく、大英図書館に所蔵されたウォリック版マニュスクリプト(Add MS 54570) に残された修正箇所にも焦点を当て、グレヴィルがどのように意匠を凝らし、暗示的そして間接的にジェイムズを批判しているかを追求する。

３．研究の方法

（１）グレヴィルの作品における解釈を発展・応用させるために、『ムスタファ』の修正前と修正後テクストの違いを比較し、加筆修正された箇所を特定する。そして加筆された表現に国王ジェイムズの特徴が反映されていることを検証する。

（２）ジェイムズ朝期に書かれた詩集『シーリカ』の 85 番以降の作品の中でも、宗教を題材とした作品に焦点を当て、ジェイムズの宗教政策における批判を実証主義的に浮き彫りにする。分析の際に、英国アルミニウス主義と文学作品との関連を指摘した Richard Cust and Ann Hughes (1989), Nicholas Tyacke (1990), Peter White (1992), Achsah Guibbory (2001)らの知見を援用しながら、ジェイムズのアルミニウス主義に対する寛容政策への反発がグレヴィルの論考詩『宗教論』(*A Treatise of Religion*, 1670)に書かれていることを指摘する。さらに、David Norbrook (1984)や Amada Maggi (2005)らによるグレヴィルの宗教詩研究の知見も踏まえながら、『シーリカ』の後期詩作品の中に内包されたジェイムズ批判を浮き彫りにする。

（３）他のグレヴィルの作品と関連付けながら、『シーリカ』の中にジェイムズではなく、エリザベス女王を称賛する詩人グレヴィルの姿を見出す。分析の際に、エリザベス女王を理想の君主とする風潮がジェイムズ朝期にあったことを論じた、Stephen Greenblatt (1988)、Curtis Perry (1997)、Yuichi Tsukada (2019) などの先行研究を基に検証を進める。

４．研究成果

論文掲載（２件）

１件目の成果は広島大学に提出した博士論文 ‘Fulke Greville and His Literary Critiques of Court Corruption in the Jacobean Government’ (「フルク・グレヴィルとジェイムズ朝期における宮廷腐敗への批判」) (甲第 8426 号)である。第１章では、『ムスタファ』がジェイムズ朝の宮廷を表象する作品として再解釈できる可能性を提示し、作品に内包されるジェイムズへの批判を見出した。特に新しい着眼点として、グレヴィルが一度エリザベス朝期に書き終えた修正前の『ムスタファ』のテクストも分析対象に加えた点である。テクストの比較・分析の結果、修正後の『ムスタファ』では帝王ソリマンの持つ父と王の二面性がジェイムズの持つ父と王の二面性と酷似していることが判明した。さらに、次期国王として国民から期待されていた息子のムスタファがソリマンによって処刑されるというプロットが、『ムスタファ』が加筆修正されていた時に起きたヘンリー皇太子(Henry Frederick Stuart, 1594-1612)の夭折と重なっており、ヘンリー皇太子の人気に嫉妬した国王ジェイムズが暗殺したという噂が作品に反映している可能性を突き止めた。第２章では宗教の観点からグレヴィルの政治批判を論じたものである。特にグレヴィルは、ジェイムズによるウィリアム・ロード(William Laud, 1573-1645)の依怙贔屓を暗示的に批判していたことを指摘した。グレヴィルは、ロードの台頭によって英国アルミニウス主義が英国国教会に浸透していくことを危惧しており、『宗教論』や『シーリカ』の宗教詩で暗示的にアルミニウス主義を批判していたことを論じた。第３章では、グレヴィルの作品には、議会を軽視するジェイムズへの批判があることを論じた。イギリスの財政難を打開するためにジェイムズが強行した課税はイングランドの貿易にまで影響を与え、「ベイツ裁判」(Bates’s Case) に見られるように、貿易商からも反発を受けた。国民を重んじることをエリザベス朝の頃から議会で主張してきたグレヴィルは、ジェイムズの財政政策への批判を『サー・フィリップ・シドニーへの献呈』(*A Dedication to Sir Philip Sidney*, 1652)だけではなく、『君主論』(*A Treatise of Monarchy*, 1670) で展開した。その批判を展開する際に、グレヴィルは亡きエリザベスを理想の君主として描くことで、ジェイムズが君主として劣っていることを暗示的に批判していた。第４章では、財務大臣としての経験が『シーリカ』のソネット 94 番の創作に影響を与えたことを、ウォリック版マニュスクリプト(Add MS 54570)に残されたグレヴィル直筆の下書きから新たに指摘した。分析の際に、グレヴィルは財務大臣として政治の汚職を排除するために行政改革に着手したことを踏まえたことで、ソネット 94 番がジェイムズ朝の課税をテーマとした作品として実証主義的に分析可能であることを指摘した。結章では、グレヴィルは自らの墓碑銘にエリザベスの「しもべ」(‘SERVANT’)と刻むことでエリザベス女王に対する永遠の忠誠心を表明し、ジェイムズに対しては「国王ジェイムズの相談役」(‘CONCELLER TO KING JAMES’)と刻むことで、それぞれの君主に対する自分の立場の違いを表明していたことを指摘した。

２本目の成果は、査読誌 *Modern Language Review* に掲載された論文である（2023 年 7 月に出版予定）。この論文では、博士論文の第１章で扱った戯曲『ムスタファ』におけるジェイムズ批判をさらに詳細に分析した。具体的には、ソリマンが自分の息子を反逆者として処刑したことが、チフスによって夭折したヘンリー皇太子をジェイムズが暗殺したという噂と関連することを指摘した。さらに、ソリマンの妻ロッサがムスタファを反逆者として処刑するように仕向けるその姿は、当時求心力を増していたヘンリー皇太子を批判してジェイムズの機嫌を取ることで、立身出世を狙っていた宮廷人と重ねられていることを実証主義的に論じた。

研究発表（２件）

１件目は十七世紀英文学会関西支部第 216 回例会(2021 年 3 月 27 日/オンライン開催)において、「息子に嫉妬する父親 :『ムスタファ』におけるジェイムズ１世とヘンリー皇太子の表象 (拡大版)」として発表した。

２件目は本研究課題の遂行の際に得られた副次的な成果である。シェイクスピアとジョン・フレッチャーによる『二人の貴公子』（*The Two Noble Kinsmen*, 1634）にはジェイムズによる平和主義政策がもたらした失業兵士の増加が揶揄されていることを、日本英文学会中国四国支部にて「‘Strete’ から ‘Flinty Pavement’へ : 道路史から解釈する『二人の貴公子』と都市に職を求める失業兵士」と題して発表し、情報交換を行った。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 Yuichiroh Nishino	４．巻 －
２．論文標題 Fulke Greville and His Literary Critiques of Court Corruption in the Jacobean Government	５．発行年 2021年
３．雑誌名 博士論文(甲第8426号) (広島大学)	６．最初と最後の頁 －
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Yuichiroh Nishino	４．巻 118.3
２．論文標題 JEALOUSY TOWARDS HIS OWN SON: RUMOURS AROUND PRINCE HENRY ’S DEATH IN FULKE GREVILLE ’S MUSTAPHA	５．発行年 2023年
３．雑誌名 Modern Language Review	６．最初と最後の頁 －
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 西野友一朗
２．発表標題 ‘Strete’ から ‘Flinty Pavement’へ： 道路史から解釈する『二人の貴公子』と都市に職を求める失業兵士
３．学会等名 日本英文学会中国四国支部
４．発表年 2021年

１．発表者名 西野　友一朗
２．発表標題 息子に嫉妬する父親：『ムスタファ』におけるジェイムズ１世とヘンリー皇太子の表象 (拡大版)
３．学会等名 十七世紀英文学会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関